

スポーツ健康科学科における教員養成に対する理念等

教員養成に対する理念・構想・養成する教員像

【スポーツ健康科学科】

スポーツ健康科学科は、スポーツと健康科学に関する専門的な知識を修得したうえで、健康づくり運動やレクリエーションスポーツの実践力や指導力を有した人材及び健康科学の観点からスポーツパフォーマンスをサポートすることができる能力を有した人材を養成することを目的としている。身につけるべき学習成果として、次の5つを定めている。①幅広く深い教養と総合的な判断力、豊かな人間性を育む。②スポーツを科学的に研究し、科学的方法に基づくスポーツや心身の健康に関する専門的な知識や技術を身につける。③体育学および健康科学分野における専門的な知識を統合的に理解・応用することができる。④スポーツの指導能力を獲得することを通じ、高いコミュニケーション能力とリーダーシップを発揮できる。⑤健康づくりやスポーツパフォーマンスの向上を支援するための知識や実践力の獲得を通じ、高い倫理観と社会貢献への意欲をもって行動できる。特に、スポーツ健康科学科では、⑤健康づくりやスポーツパフォーマンスの向上を支援するための知識や実践力の獲得を通じ、高い倫理観と社会貢献への意欲をもって行動できるという点の専門性を高めることを目指している。

スポーツ健康科学科の教員養成においては、学科の目的・性格を踏まえ、健康科学に関する専門的な知識を修得した、保健教育に特に強く、また運動による健康づくりや生涯スポーツへの継続性に配慮した体育教育を展開できる人材を養成することを目指すことを理念としている。

スポーツ科学部では、体育学部時代から多くの保健体育教員を輩出してきた実績を基礎としつつ、新たな時代に求められる教員の資質能力の向上に対応すべく教員養成において取り組んでいる。スポーツ健康科学科の教員養成課程においては、「教科に関する科目」の「体育実技」については、文部科学省（学習指導要領）が定める主要実技種目（17競技）すべてを受講でき、生徒の心身の発達段階に応じた実技指導力、課外活動指導力を修得できるようにしている。また、「教科に関する科目」のその他の領域については、体系的な学習により保健体育科に必要な知識を効率的に身につけられるようにしている。3年次からのゼミナール・卒業研究では、教員として働く上で欠くことのできないコミュニケーション能力やレポート作成能力、高い教養を身につける機会を提供している。教育実習については、スポーツ健康科学科を含めてスポーツ科学部の専任教員全員が、学校訪問指導を行っている。また、全ての教育実習校を訪問するために、専任教員に代わって訪問指導等をする特別講師の配置も行い、指導の充実を図ることとしている。さらに、「スポーツ医学A・B」、「健康診断演習」、「レクリエーション指導法Ⅰ」、「レクリエーション指導法Ⅱ」、「障害者スポーツ実習」、「健康運動実習A～C」など、保健教育、学級活動や生徒指導に生かせるような科目が多く配置されている。

このような理念・構想に基づいた教員養成によって、スポーツ健康科学科では、高度の専門教育を基盤とした教科に関する専門知識を有するとともに、幅広い教養を持った教員の養成を目指している。このことにより、明るく豊かな生活を営む態度を育てるという保健体育科の究極的な目標を達成することができると考えている。

教職課程の設置趣旨（学科等ごと）

【スポーツ健康科学科】

スポーツ健康科学科は、本学園の理念と大学における教職課程の設置趣旨のもと、運動・スポーツにかかわる専門知識と技能を身につけた学生が、教育の現場でその使命感や責任感、ならびに教育的愛情を持って将来を担う子どもたちの指導をして欲しいとの願いを持ち、常に教師として自覚を持って行動し、教育現場において即戦力となる人材育成を目標とする。特に、スポーツ健康科学科に教職課程を設置する趣旨は、スポーツが及ぼす影響を医学、社会学、心理学等の視点から理解し、健康づくりやレクリエーションの実践および指導法を修得するカリキュラムを備えた学科教育を通じ、地域社会にも貢献する視点で保健体育科教育を実践する教員を養成することである。

学科の教育課程上も、スポーツ科学部固有科目の82単位の取得が必要であり、この中に保健体育科

の免許状取得に必要な教科に関する科目のすべてが含まれている。

《中学校教諭一種免許状：保健体育の設置趣旨》

スポーツ健康科学科では、1年次において、「トレーニング演習」で体育実技の各運動領域における基本的な動きを理解し、運動領域に応じたトレーニングの基本的な方法を身につけた上で、さまざまな運動領域のスポーツ実技を履修し、運動領域の特性を理解し、実技指導の基礎力を身につける。「救急処置論」を履修し、教育現場で生じ得る救急処置に関する理論を学ぶ。「障害者スポーツ実習」において、障害者へのスポーツ指導への経験と理解を深める。「レクリエーション基礎実習」および「レジャー・レクリエーション論」の履修により、生涯スポーツ指導の基礎技術と理論を学ぶ。2年次において、教職課程に関連する科目に位置づけられる専門科目を履修し、保健体育の理論的理解の基礎づくりを行い、学科の基礎科目に位置づけられる科目の単位を修得し終え、保健体育の教育内容に関する基礎的な知識を身に付ける。1年次に学んだ運動領域とは異なる実技科目を履修し、運動領域の特性を生かした指導方法に留意して、自らの運動経験を深める。「スポーツ医学A」の履修により、内科的視点からのスポーツ医学の知識を身につける。「レクリエーション指導法Ⅰ・Ⅱ」を段階的に学ぶことにより、レクリエーションの指導技術を身につける。「スポーツ医学B」の履修により、外科的視点からのスポーツ医学の知識を身につける。また「スポーツ健康行動論」を学び、人々のスポーツや健康運動等への取り組み方について、文化・社会的な側面や行動科学的な立場から総合的に理解を深める。3年次において、授業実施等に関して必要となる事柄を理解し、また必要な技術を修得する。さらに、教育実習に臨むための適切な心構えを持てるようにする。教科に関する専門的知識をさらに深め、「リハビリテーション」の履修により、身体機能の回復に役立つ運動指導の在り方について学ぶ。「野外活動論」において、野外活動を通じ生徒の協調性・コミュニケーション力を養うための理論を学ぶ。「障害者スポーツ論」において、既習の障害者スポーツ指導実践に関する理論的理解を深める。「健康診断演習」を履修し、学校教育現場における生徒の健康管理および健康状態の評価のための知識を学ぶ。4年次においては、教育実習における保健及び体育の授業実習に備え、保健体育科の教員として必要とされる知識・教育実践力を身につけることができているかどうかの確認を行いながら、学級経営や学校における人的・物的マネジメントなどの広い視点から、教育活動を考えることができることをめざす。「スポーツ社会学」を学び、地域社会に果たす身体活動の役割の観点から、生徒にスポーツ文化を享受させるための知識を学ぶ。「救急処置法」により教育現場で必要とされる救急処置の実践力を身につける。

このような到達目標を持ったスポーツ健康科学科で学んだ学生は、特に以下のような点で、中学校保健体育教員として活躍が期待される。

保健体育科の体育分野の指導内容については、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、小学校から高等学校までの12年間を通して、指導内容の体系化が図られている。その中で、中学校の時期は「多くの領域の学習を経験する時期」と「卒業後に少なくとも1つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期」と位置づけられている。スポーツ健康科学科の教職課程では、トレーニング演習を必修として、スポーツ実技種目を9種目選択必修としている。こうして修得した実技能力は、多様な中学校段階での指導において、大変有効であると考えられる。特に、中学校で必修となっている体づくり運動、体育理論の指導においては、豊富な専門的知識を十分に活用した授業が期待できる。

保健体育科の保健分野の目標においては、健康・安全に関して小学校段階での実践的な理解をもとに、中学校では科学的な理解ができることを掲げている。教科の指導法において、保健科教育法として独立した科目を必修としており、多数のスポーツ科学部固有科目の受講と合わせて、保健分野の指導において科学的な知識に基づいた授業が展開できる。

《高等学校教諭一種免許状：保健体育の設置趣旨》

スポーツ健康科学科では、1年次において、「トレーニング演習」で体育実技の各運動領域における

基本的な動きを理解し、運動領域に応じたトレーニングの基本的な方法を身につけた上で、さまざまな運動領域のスポーツ実技を履修し、運動領域の特性を理解し、実技指導の基礎力を身につける。「救急処置論」を履修し、教育現場で生じ得る救急処置に関する理論を学ぶ。「障害者スポーツ実習」において、障害者へのスポーツ指導への経験と理解を深める。「レクリエーション基礎実習」および「レジャー・レクリエーション論」の履修により、生涯スポーツ指導の基礎技術と理論を学ぶ。2年次において、教職課程に関連する科目に位置づけられる専門科目を履修し、保健体育の理論的理解の基礎づくりを行い、学科の基礎科目に位置づけられる科目の単位を修得し終え、保健体育の教育内容に関する基礎的な知識を身に付ける。1年次に学んだ運動領域とは異なる実技科目を履修し、運動領域の特性を生かした指導方法に留意して、自らの運動経験を深める。「スポーツ医学 A」の履修により、内科的視点からのスポーツ医学の知識を身につける。「レクリエーション指導法 I・II」を段階的に学ぶことにより、レクリエーションの指導技術を身につける。「スポーツ医学 B」の履修により、外科的視点からのスポーツ医学の知識を身につける。また「スポーツ健康行動論」を学び、人々のスポーツや健康運動等への取り組み方について、文化・社会的な側面や行動科学的な立場から総合的に理解を深める。3年次において、授業実施等に関して必要となる事柄を理解し、また必要な技術を修得する。さらに、教育実習に臨むための適切な心構えを持てるようにする。教科に関する専門的知識をさらに深め、「リハビリテーション」の履修により、身体機能の回復に役立つ運動指導の在り方について学ぶ。「野外活動論」において、野外活動を通じ生徒の協調性・コミュニケーション力を養うための理論を学ぶ。「障害者スポーツ論」において、既習の障害者スポーツ指導実践に関する理論的理解を深める。「健康診断演習」を履修し、学校教育現場における生徒の健康管理および健康状態の評価のための知識を学ぶ。4年次においては、教育実習における保健及び体育の授業実習に備え、保健体育科の教員として必要とされる知識・教育実践力を身につけることができているかどうかの確認を行いながら、学級経営や学校における人的・物的マネジメントなどの広い視点から、教育活動を考えることができることをめざす。「スポーツ社会学」を学び、地域社会に果たす身体活動の役割の観点から、生徒にスポーツ文化を享受させるための知識を学ぶ。「救急処置法」により教育現場で必要とされる救急処置の実践力を身につけ、さらに「衛生・公衆衛生学演習」を履修し、既習の専門的知識を統合し、人間が健康に生きるための社会環境の全体的評価と将来展望について思考する力を身につける。

このような到達目標を持ったスポーツ健康科学科で学んだ学生は、特に以下のような点で、高等学校保健体育教員として活躍が期待される。

保健体育科の科目体育の指導内容については、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、小学校から高等学校までの12年間を通して、指導内容の体系化が図られている。その中で、高等学校段階は「卒業後に少なくとも1つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期」と位置づけられている。高等学校段階での生涯スポーツにつなげることを目指した体育実技の指導においては、学科で必修として学んだ数多くのスポーツ種目に関する専門的知識を十分に活かすことができる。また、高い技能レベルの運動部活動の指導にも対応することができる。

保健体育科の科目保健の目標においては、健康・安全に関して小学校段階での実践的な理解、中学校での科学的な理解をもとに、高等学校では総合的な理解ができることを掲げている。教科の指導法において、保健科教育法として独立した科目を必修としており、学部固有科目として学んだ専門的知識を総合的に整理することにより、内容豊富な保健の授業を行うことができる。さらに、全学共通科目で身につけた幅広く深い教養と総合的な判断力により、高等学校レベルで求められる科目保健の総合的な理解にも対応できる。